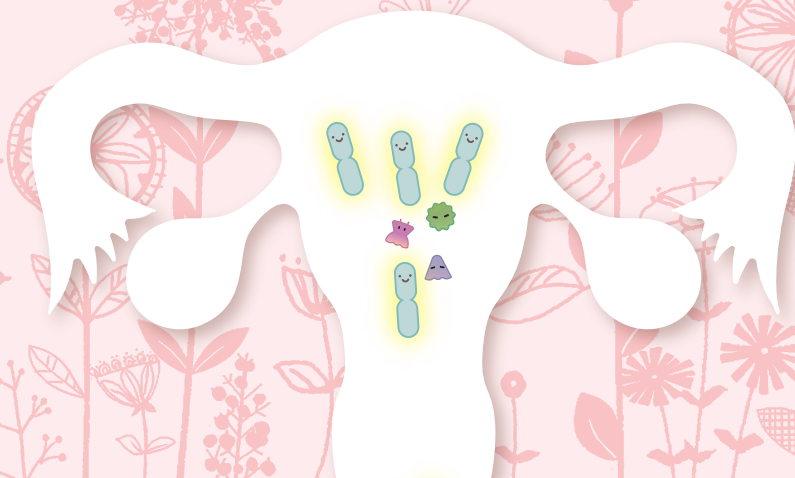
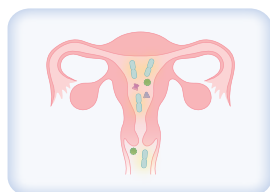


子宮内フローラを知ること広がる未来

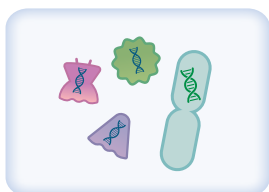


子宮内フローラ検査の流れ

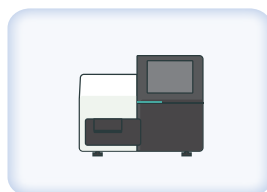
従来の細菌検査では、難培養性の菌や微量の菌を把握することは難しく、子宮内の細菌叢を網羅的に理解することは困難でした。次世代シーケンサーは一度に大量のDNA配列を解読することで、試料に含まれる全ての細菌のDNA配列を解読し、網羅的な菌コミュニティを調べることができます。



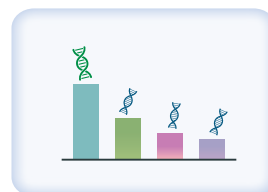
子宮内あるいは腔内から試料を採取し、弊社ラボラトリーに送付



試料よりDNAを抽出し細菌の16SrRNA遺伝子領域のみを増幅

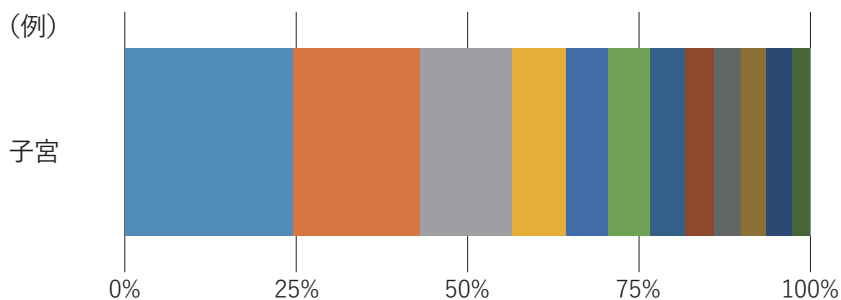


次世代シーケンサーを用いて、DNA配列を解読



菌特有の配列とその数から存在量を推定しレポートとして返却

菌ごとの存在比率をわかりやすくレポート



菌名	子宮 (メドジンピベット)
1 Lactobacillus	24.5%
2 Gardnerella*	18.5%
3 Megasphaera	13.4%
4 Prevotella*	7.9%
5 Actinomyces	6.2%
6 Enterococcus	6.1%
7 Atopobium*	5.1%
8 Mycoplasma*	4.2%
9 Dialister	3.9%
10 Sneathia	3.7%
11 Crostridium	3.7%
12 Ureaplasma*	2.7%
13 Others	0.1%

子宮内フローラ（子宮内細菌叢）とは

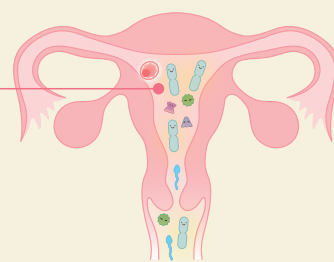
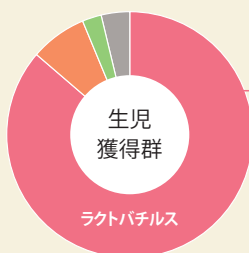
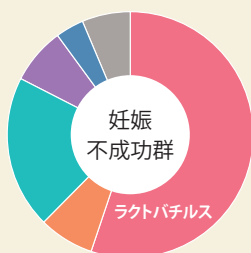
生殖器内は外気に触れる皮膚と同じように、様々な細菌が共存したフローラ（細菌の集合体）を作っています。腔内に存在する善玉菌（ラクトバチルス属）は、ウイルス感染や他の菌が増殖できない環境を作ることによって、胎児を感染症から守る役割をしていることが知られています。

一方、子宮内はこれまで無菌だと考えられていました。2015年に米国ラトガース大学の研究者らが子宮内にも善玉菌が存在することを見つけ、2016年には米国スタンフォード大学のサイモン博士らが、子宮内フローラが乱れていると体外受精の結果が悪くなることを発見しました。子宮内フローラが乱れ雑菌が増えると、子宮内膜で免疫が活性化し、受精胚を異物として攻撃してしまう可能性が指摘されています。

■ 子宮内にはラクトバチルスが存在

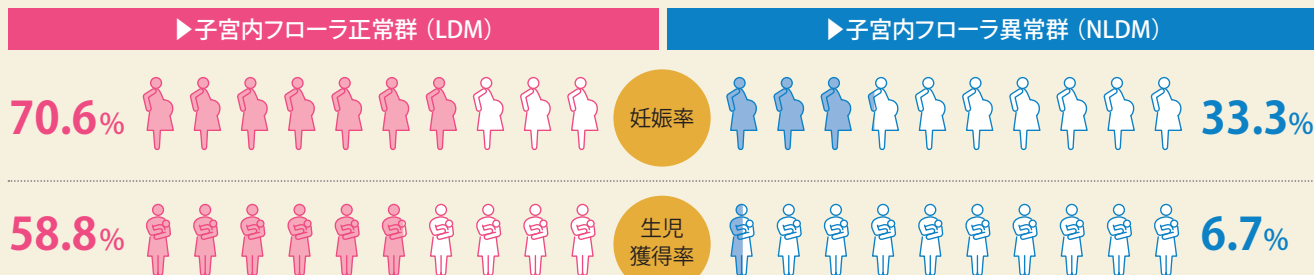
体外受精によって生児を獲得した患者群の子宮内フローラは、ラクトバチルス属が大多数を占めていた。一方、妊娠不成功分ではその他の細菌が増殖していた。(Moreno et al, AJOG, 2016より改変)

- ラクトバチルス
- ビフィドバクテリウム
- プロピオニバクテリウム
- ガードネレラ
- ストレプトコッカス
- ペイロネラ
- その他



■ 子宮内ラクトバチルスの妊娠・出産への影響報告データ

スペインのIVI Valenciaクリニックにて、体外受精を実施している35人の不妊治療患者を対象に子宮内フローラを調べ、ラクトバチルス率が90%以上と未満の2群で、妊娠や出産に影響を与えるかどうかを調べた結果。(Moreno et al. AJOG, 2016より改変)



子宮内フローラ検査により期待されること

検査対象

妊娠を望んでいる方
将来、妊娠を望む方

例えば...

- 対応策を考えたい
- 色々試してみたい
- 検討材料を増やしたい

検査でわかること

- ▶ ラクトバチルス属の割合
- ▶ 子宮内フローラのバランス
- ▶ ラクトバチルス以外の細菌の有無

【注意】この検査は、診断を行うものではありません。